

549

36

藝術鑑賞の態度



始



藝術鑑賞の一態度

1

文藝研究會叢書

# ■藝術鑑賞の一つの態度

12 今寄贈本

最も取るに足りぬと思はれる遊戯の時が意外の祝福を齎らす事に驚かされる事は屢々だ。それは遊戯が多くの場合に人々が眞に自己の最善の力を注ぐ物だからのみでなく、かゝる際には我々の捉はれた、日常生活の配慮の壓迫が弛み、外部なる物のより喜ばしい力が我々へ自由に出入し、我々を支配するからである。

ペーター

關 康 郎

## 一つの自問

「あの芝居をこれよりも御好きになるのは一体何處が面白くてゝす？」と問はれて、「そりやおのお芝居の女主人公の方が澤山衣裳を變へますもの」と答へた婦人があると云ふ。「いや、別に面白いと云ふんぢやないが他にする事

もないからさ」と辯解迄する観劇家があり、「見ておかねば話が出来ぬぢやありませんか」と云ふ社交的な観劇家も随分に多いと云ふ。尤もこれは英語



大正  
15. 4. 2.  
寄贈

で書かれた戯曲の研究書にある話である。併し文學を讀み、繪画を見、音樂を聞いた後に、「あれは何であつたか？」と云ふ自問が起り、結局如上の觀劇家等の様な愚にもつかぬ弱い自答を余儀なくされ、時には辯解に近い自答をすら余儀なくされるのは我等の場合にも可成りに多い事柄だ。かうして賢明な文藝鑑賞の難が屢々嘆せられる。そして理屈でゆかぬ事丈けにこの嘆は愈々深い感がある。

「あれは何であつたか？自分が藝術を相手として舞踏したあの心豊かで生新だつた照應や調和や動搖やの經驗は自分がとつて遂に何物でもなかつたらうか？」

勿論我々は藝術の鑑賞に當つて何々を如何に幾許丈け得やうと考へる者でない。がかうした自問の發せられた時、それに對して我々の心が満足の情をの物を以つて答とする事が出来ないなれば、當然その鑑賞は鑑賞者にとつて

何物でもあり得ぬであらう。満足それ自身がその或る何物かであらねばならぬのだ。我々はこの満足を温め育くむ事に依つてのみこの或る物の名を讀む事が出来るのである。それを温め育くむ事を知らぬ者は遂に何物であるかを解さない。然らばその満足とは如何なる性質のものであるか？又それには如何なる態度を要するか？この問題に光明を齎す爲め私はこゝに一つの藝術鑑賞の卓れた型をとり、その考察を試みたい。即ちかの「文藝復興」に於いて示されたペーターの鑑賞態度をである。

## 文藝復興に於けるペーターの鑑賞態度

こゝに一枚の繪があるとする。それは我々が眼にする機會の多いダ・ヴィンチのモナ・リザの繪だとしよう。この一人の女性の肖像は、精細に眺めると「藝術は如何なる程度に迄自然を模することが出来るかと云ふことを見やうと思ふ人は、何れもこの頭部の完成に就てそれを知ることが出来る。それを見れば木筆の極度の精技に於て初めて描寫し能ふ筈であるところの特質がそれ／＼忠實に表現されてゐる。眼には生ある人に見る燃ゆる輝きとうるみがあり、そのぐるりには同じく自然に之れを見る蒼白にして紅味を帯び、稍青

ざめてゐる圓が圍む。

それに睫毛が生えてゐる。之等はそのまゝに寫す可く甚だ困難を敢てして初めて行へるものである。眉毛も亦極めて精細に描かれて、或る所は薄く或る所は濃く、それ／＼同じ方向に生え揃ひ、列を離れた毛筋はそれが皮膚に生じた様に於て寫され、毛穴も一々に到底之れ以上自然には描けぬと云ふ程度まで充分表現されてゐる。——優美に薔薇色を帯びた奇麗な鼻孔を持つ鼻は、容易く人をして生あるかの如く疑はしめ、そのアウトラインに於て賞す可き限りの口は、顔の茜色と程善く調和する唇を以つて最高の完成に在り、頬の紅色は描かれたものと思へない。寧ろそのまゝに肉であり血であるかの如き趣きがある。

咽喉の凹所を熱心に見詰める人は、直ちに脈搏の鼓動を聞くと信ずる他なく、誠に此の作は如何なる大膽の大家をも戦慄せしむ可く、如何に藝術の奇

蹟に馴れし者と雖も觀者の悉くをして驚愕せしむ可く、充分完全に描かれたと云つて過言でない。

(モナ・リザは秀れて美しい夫人であつた。レオナルドは彼女の肖像を描く時、終始彼女の傍らに人を座さしめ、そして歌ふか樂器を弄ぶか、又は戯れ言を云ふか、何等かの手段を用ひて遂には彼女が絶えず愉快を感じるに至るまで、夫人を慰め、そして屢々画家が描くところの肖像にとり入れ勝ちの憂鬱の表情を彼女の面てには宿らせぬやう、用意を怠らなかつた)。レオナルドの此の肖像画に見れば、一般のそれとは反對にそこには表情の世にも悦ばしく、笑ひの極めて快よきものがあり、従つて之れを見る程の人はそれを寧ろ人の世のもの以上、神聖のものと思へる。人生そのものに依つてもかくの如き様姿は現はし得ぬ上から、それは永く驚く可き作として讚譽に浴した」

(木村莊八氏譯「サリのダ・ヴィンチ論より」)

「我々は洗練された鑑識家「サリ」の如くこの繪を斯様に見、斯様に味はつたとしよう。この場合に於けるモナ・リザは我々にとつて野球戲等の美技と異ならない。精妙なる眼、精妙なる眉、唯それ丈である。これは技巧の鑑賞だ。モナ・リザから受ける戦慄や驚愕は未熟であつて、充分鑑賞者を捕へない。従つて画中に我々が生きてゐない。我々が生きた人と對して言葉なくおる事の困難な如く、生動する繪を前にして無言である事が困難である。繪が自らの心霊と心情を語り、我々も亦繪に呼びかけてゆく。相互の生命が照應し、燃燒するのだ。然るにこの鑑賞にあつてモナ・リザの眼は生命に輝き、咽喉の四みは脈打ちを傳へつゝ、而かも我々と肖像の間に格別の呼應なく、結果に於て彼女は無生物にも近い存在だ。この反生命的鑑賞は寧ろ不可解である。

更らに此の肖像をペーターと共に鑑賞すれば如何？ペーターはその著「文藝復興」の「レオナルド論」の中に記してゐる。

「かくも不思議な様にして水の邊りに立つこの女性は、幾千年の間絶えず人間が望んで止まぬ物を現はしてゐる。その頭は有らゆる末世の物の宿る頭で、臉は軽く疲れを見せてゐる。それは内面のものが肉体の上に熟して現はれた美であつて、不可思議な思想や空幻的な夢想や又精妙な情熱が微か宛積もつて現はれたものである。暫しの間それをかの色白いギリシヤの女神の一人か、又は古代の佳人の一人と並べて見やう。その時女神や佳人は如何許りこの美人の爲めに悩むだらう。この美人には靈が肉の凡ての病ひと共に入り込むでゐるのだ！この世の凡ゆる思想と經驗は、それらが外形を精妙にし、表現的とする能力の範圍で、ギリシヤの獸性、ローマの色慾、その精神上の願望と想像的な愛戀とを持つ中世期の神祕な思想、又異教世界の歸來とボルジア家

の數々の罪を蝕刻し、具象化してゐる。彼女はその座を圍む岩々よりもなほ老齡だ。夜毎に墓を出る吸血鬼の如く彼女はこれ迄に幾度となく死んでゐて、墓の祕密に通じてゐる。又深海の海女をした經驗を有ち、身の周りに海底の光を放つてゐる。彼女は又珍奇な織物を求めて東邦の商人等と通商した事がある。彼女はレダの如くトロイのヘレンの母だつた。又彼女は聖アンの如くマリアの母だつた。そしてこれらは凡て彼女に對して單なる立琴か笛の音に過ぎなかつた。それらは唯變化する容貌を形づくり臉と兩の手とを染めてきた精妙の中にのみ響いてゐる。幾千幾萬の經驗を一身に集め有つ久遠の生命と云ふ空想は昔からある空想だ。近代の哲學は人性の觀念を、思想と生命の全様式に依つて作用せられ、且つそれらを自らの内に總括してゐるものと考へてゐる。實にモナ・リザ夫人は古い空想の体现であり、近代思想の象徴となつてゐる」。

靈と肉との微妙なるこの交渉！その知覺！

或る時私は音樂に聞きとれてゐて、不圖思ひ當つた事がある、「あのペーターのモナ・リザの玩味はこれだ。あれは見る鑑賞でなくて聞く鑑賞である。阻まれ制限される所がない。さうだ。モナ・リザの姿は彼の前に明滅しつゝその心情や心靈の歌の伴奏をしてゐる。モナ・リザの音樂！」そしてこれをミュージイカル・ファンターズイアだと云つたベンソンの言葉を思ひ出して微笑むだ。これは音樂的鑑賞である。確かに彼は神祕古怪な、モナ・リザの心と融合して諧調の世界に生きたのだ。

彼女の心は彼の心だ。彼は彼女の心の根源に立ち入り、その凡ゆる動因を身に有つて、共に心を動かした。かくも自由に純粹に彼女の肉の奥に生き、外に生き、一つに動いて離れては合ふ夢幻の鑑賞！彼は画中にあつて生きてゐる。モナ・リザも亦彼の内に靈肉凡てを以つて生きてゐる。兩者の生命が照

應して燃燒してゐる。即ち繪が自らを語り、鑑賞者が繪に呼びかけ、言葉かけてゐる。これは生命的鑑賞だ。

この繪の作者レオナルドは云つてゐる。「良き肖像画家は人と人の心靈の思想とを併せ画かなければならない。前者は容易で後者は至難だ。この心靈の動きは四肢の動作や状態を通して示される」こと。心靈を離れた外貌や四肢が生命ある人間の肉体にあり得ぬ如く、左様な物は肖像画にもあり得ない若し左様な物がありとするならそれはその繪が未熟不完全な証據である。従つて單なる人物の容姿のみが肖像画でなく、そこにある心靈の暗示その物も亦肖像画だと云ひ得る。この故に肖像画の鑑賞に當つては單にその外貌を見るのみで足りない。「四肢の動作や状態を通して示される心靈の思想」をも併せ見ねばならぬ。特にこの注意をしたレオナルドの物に於ては然りである。こ



の情味に於てグサリ流の鑑賞は不充分不完全であり、ペーターのそれは完全である。

グサリ流の鑑賞にあつてモナ・リザが單なる野球戲等の美技に過ぎない事は既に記した。それは吹き過ぎる微風に過ぎぬと云つてもよい。目より目の周りへと容赦なく過ぎてゆく。そしてそこに起る驚嘆なり感激なりの情念に成熟する余裕を與へない。鑑賞者がその心の奥の底から、その全部を以つて、その生命を打ち込むで、その精妙なる眼や眉や頬を嘆賞する事がない。即ち鑑賞者がその肖像の中に自己を有ち、自己を生かすと云ふ事がない。對象の中に自己を有ち、自己を生かすとは、例へば野口米次郎氏が北齊論中「神奈川沖浪裏」の所で云つておられる「……大きな波濤は高く孕み低く窪む、まるで恐ろしい大蛇の腹のやうに生臭い呼吸で上下してゐる。恐ろしい水の泡は

周圍に飛散する、その爪はまるで人を威嚇する龍の爪のやうだ。何と云ふ恐ろしい印象を私共はこの波から受けるであらう……一寸見たっけでも私共はびしよ濡れになり、水へ溺れ込むやうな感じを持つ」(歌麿北齊論)と云ふ如き事である。薔薇色の奇麗な鼻孔あるモナ・リザの鼻は容易に人をして生あるかと疑はしめるとも、遂に彼女からその「心靈の思想」を聞く事なく。鑑賞者は自己を感じ、自己を発表する事がない。即ち鑑賞者はモナ・リザに生きると云ひ得ぬ。ペーターはモナ・リザの中に自己を有ち、自己を生かした。それは如何にして斯く迄自由に純粹に彼女の肉の奥に徹入合一したかと思議がらせる程である。慎重にその鑑賞を見るがよい。それはモナ・リザに於ける教養人ペーターの自己展開であり、自己の耕作であり、又實に自己の味到である事が知られやう。最も深く廣い意味に於ける彼の智識は、モナ・リザを限定する事なく、モナ・リザの内に呼吸を初めてゐる(この對象に依つて智

識を生かすと云ふが彼の鑑賞の特徴だ。彼はモナ・リザの内にあつて吸血鬼やレダに迄脈搏を打たせてゐる。この鑑賞に於て彼は心内にあるモナ・リザ的のものを生かしたと云はねばならぬ。

鑑賞者が自己をその対象の内に有ち、且つ生かすと云ふ事は、その対象が鑑賞者の内に自己を有ち、且つ生かしたと云ふ事に外ならぬ。即ち神奈川の沖浪は野口氏の内にあつて、そこで高く孕み低く窪み、大蛇の腹のやうに生臭い呼吸で上下した。そしてその力は鑑賞者の内に發揮され、そこを支配する。野口氏はびしょ濡れになり、水の中へ溺れるかと感ずる。モナ・リザはペーターの内に生き、自己の凡てを語り、彼をモナ・リザ的のものと化した。そして更に諸々の願望を呼び覺ます。

これに依つて見れば所謂繪が生動してその精神、性能を發揮する爲めには、鑑賞者がその画中に生きねばならない。かの見えざる「心靈の思想」を四肢の動作や状態を通して見る法は、鑑賞者がその眼のみならずその心靈を、即ちその全部、その生命を、そこに注ぎ、そこに生きるより外にない。対象と鑑賞者と、この兩者の共生を外にして完全なる藝術の鑑賞はあり得ぬ。サリのそれはこの共生の点に欠け、ペーターのそれはこの点理想的に完全である。前者のは單なる知覺、後者のは体得である。

ペーターは「文藝復興」の「ジヨルジョネ派論」の中で云ふ、「音樂の完全なる瞬間にあつては、その目的と手段の區分なく、その形式とその素材と、その題目とその表現の區分がない。それらは互ひに他の内に在り、互ひに完全に浸透し合ひ飽和してゐる。従つてそれに、その完全なる瞬間の状态に、凡ての藝術は絶えず進まんとし、憧憬れるものと見做され得る。……従つて審美批評の重なる任務の一つは、新舊の藝術品を扱ふに當つて、それらの作

品が各々如上の意味で音楽の法則に接近する度を評定する所にある」と。

この内容、精神と形式の完全なる合一状態への憧憬とは、即ち最も完全に生命的である状態への憧憬だ。この状態に於て事物は初めて完全なる圓熟を呈する。心的なるものは健かに力を發動する所を得、物は單なる物的存在を離れて自主的となる。力と自由に充ちた状態であり、生命の本流に還つて、永遠の實在として生きる事である。この完全を得た藝術品にのみ作家の生命は完全に打ち込まれ、作家はかゝる作に於てのみ生き得る。

鑑賞者がその対象の生命を見ん爲めには、即ち対象の内に生きん爲めには、この内容と形式の微妙なる交渉を鑑得せねばならぬ。モナ・リザを生きたる、物語りするものとして見ん爲めには、その肉体と心靈の微妙なる交渉を感得し、その合一の様を賞味せねばならない。此点に於てヴサリは不充分であり、ペーターはモナ・リザを音樂化した程も完全である。事實ペーターにとつて

モナ・リザの肉体はモナ・リザの心靈であつた。彼は次の如く記してゐる。

「嘗つてヴサリの所有した、かの絶大な價值ある素描の一つ折の中に、レオナルドの師ヴェロッキオの意匠にかゝる多くの顔がある。その美の印象は極めて強いものでレオナルドは少年時代に幾度となくそれを寫した程だつた。かうした過去の先輩であり、師である人の意匠を、レオナルドの全作品の特徴をなすどこか險惡の氣味を帯びた計り得ぬ微笑と無關係とする事は困難だ。それは宛かもその微笑を生む原理との關係の様である。且つこれは肖像画だ。この像は少年の頃から彼の夢想の組織の上に姿を現はしてゐたと思はれる。若し明白な歴史上の證據がないなら、これは彼の理想の婦人が具象化され、遂に我々の前に現はれたものに外ならぬと想像されるかも知れない。生あるフロレンス人のモナ・リザが、レオナルドのこの夢想の人物と如何なる關係にあつたやう？如何なる奇縁に依つて、夢と人物とが斯く離れ、而かも斯

く密接に合一して生長したのであらう？最初からレオナルドの頭腦の内に形なく存在し、微か乍ら師ヴェロッキオの意匠の内に現はれて、遂にその女は夫のイル・ジョコンドの家で發見されたのである」。

レオナルドが彼女をイル・ジョコンドの家に見出した瞬間を、ペーターは如何に興味をもつて想像したらう。この爆發的な創造の瞬間！久しく堆積の上に堆積して來たレオナルドの夢や理想に吐け口が提供せられた！モナ・リザの肉体は即ちその夢その理想その物に外ならない。この肉体と心靈の奇蹟的に完全な調和合一を彼は看取した。肉即靈の看取である。で、ペーターにとつてモナ・リザの眼は限りなき言葉を放ち、その臉は物語る臉となる。彼は音樂的に鑑賞したのだ。

ペーターは同じ「ジョルジョネ派論」の中で云つてゐる、「繪は一方に於て

素描であり、他方に於て彩色である。故にこれら本質的な繪の性質は何よりも先づ官能を喜ばせねばならぬ、ヴェネチヤ硝子の斷片の如く直接に感覺的に。この愉悅を通してのみそれらは作者の意圖になるそれら以上の物、即ち詩なり、科學なりの媒介物となり得る。従つてその最初に當つては、偉大な繪は偶然に壁か床の上に現はれて暫らく遊動する光と影位の役をするに過ぎない。……この最初にして緊要なる條件が充される時、詩が序々と画中に動き初めるものである」。

最初に當つて繪は壁上に偶然遊動する光と影の役目をする物云々とは、逆に鑑賞者の立場から云ふなら、鑑賞者が放心に近い素直さを以つて繪に接し、そこに何等明確なる豫定的の物を求めるなく、その全体を對象とし、全体感に支配される事が必要だと云ふ事になる。この素直さ、即ち虚心、又所謂賢明なる受働は放たれた赤裸々の心であつて、對する一切の物をも放たれた赤

裸々の物とする。それが無意識裡なる靈交の状態を造り出す。これが更に進展して互ひの靈交は意識の圈内に出没し、人は己れの内にも他を見、他の内に己れを見るに至る。詩の發動だ。かくして鑑賞者と対象の共生境は達せられる。がこれには如上の虚心、賢明なる受働が必要である。それに依り、何等明確なる物を求むるなく、対象の全部をあるがままに受容する事が必要である。ヴサリは部分部分の技巧の妙より技巧の妙を追ひ、眼は眼とし、眼の周りは眼の周りとして慌たしく鑑賞を進めた。それは対象に捕はれぬ部分的分拆鑑賞である。より確實に対象を生かす爲めに分拆鑑賞も有用だ。がそれは全体感の裡にてされねばならない。綜合に、全一なる物に常に還元される所があらねばならぬ。けれどヴサリにはそれが無い、でモナ・リザの眼は生の輝きを發し咽喉の凹みは脈搏の鼓動を傳へつゝ、而かもモナ・リザが生きてゐない。そこには經驗に富む鑑定家の冷淡があるのだ。これがヴサリをして

モナ・リザとの生命の照應的燃焼に失敗させたのである。ペーターにはこれがない。よし分拆的鑑賞をする事があるも、それは常に全体の内にも還元されてゐる。決して彼は眼を眼としては鑑賞しないのだ。で、その対象は常にあるが儘なる全一のモナ・リザであつた。部分部分と明晰に分拆する事は多少とも対象に對し反撥的の態度である。あるが儘に全一なる物を見んとするは所謂賢明なる受働の態度である。賢明なる受働とは対象の性能を何等拘束する事なく、その全部を發現せしめ、その全部を生かしめんとする態度である。そしてそれは單なる理智のみの活動、或ひは感覺のみの活動を許さぬ態度である。それらの全部を以つて対象と調和せんとする態度がある。全部を以つて對せねば対象の全部を知る事は出来ない。してこの態度は純粹知覺の活動に自由を與へ、所謂想像的理性に自由の活動を許すのである。

かのペーターの鑑賞はモナ・リザを壁上の光と影と見る賢明なる受働の鑑

賞であつた。それで彼は彼女に依つてあれ程も靈感されたのである。

「鑑賞者が斯く素直に對象の全部と調和融合せんとするには、彼は對象が有つ本質的な限界に馴れ、充分の性質を体得せねばならぬ。如何に賢明な受働の態度をせらうとするも、その對象の繪なれば繪、詩なれば詩としての本質的な限界に馴れておらねば反撥する所が多く、充分虚心となつて適合してゆくと云ふ事が出来ない。鑑賞者がこの限界に馴れてゐない時は、例へば詩の鑑賞に當つては詩的に、繪画の際は繪画的に自己を統一すると云ふ事が出来ない。従つて何處かに必ず無理を生ずる。で、ペーターも「ジヨルジョネ派論」の初めに於てこの点に觸れてゐる。

「各藝術の官能的資材は、他の形式へは移され得ぬ各個に特殊な美の情態乃至性質と特殊な印象の系列を齎らす物だ、と云ふ原理を明瞭に了解する事

は、凡ゆる眞の審美批評の最初である。即ち、藝術は單に官能のみに訴へる物でなく、況んや理智のみに訴へる物でもなく、實に諸官能を通して「想像的理性」に訴へる物である。従つて官能の能力その物の種類別に應じた審美上の美の種類別があるものだ。各個の特性を智的な理解でなくて体得してゐる事が肝要である。

音樂的、生命的鑑賞がペーターの藝術鑑賞の特徴である。對象の形相のみならず、その内なる精神をも併せ見んとする。形相と同時にその依つて以つて生くる根源、原動力をも併せ見、併せ感得せんとする。即ち對象の根源に身を置いて、その創造的原動力を共に享受し、かくして音樂的に、生命的に鑑賞し、生活しやうとする（彼にあつて藝術鑑賞は遊戯でなくて、眞なる力強い生活であつた）。で、ペーターはモナ・リザをその容姿と容姿を生むだ心

靈とを見た如く、詩に於いても、文字に依つて表はされたる物と、その根源たるそれを生む環境なり、心的階程なりを併せ味はつた。彼はデュ・ブレエの詩「風へ」を斯く味はつてゐる。

君よ 翼速かなる、

翼の足もてさまよふは

廣きこの世の限り、

優しくつぶやきて

緑する春の草木の影揺する、

君よ

この菫

この百合やこの小花

またこの薔薇

この顔紅らめし薔薇の花

その若き蕾は開きたり

又この石竹の花 花々を君に捧げん

あゝ 優しき温かき息もて扇げ

扇げ この野原

扇げ この住家

晝の暑さに

箕もてわが小麥を扇ぐ時

……我々はデュ・ブレエの故郷で佛蘭西の穀倉たるル・ポースの地にあつて、  
そこの一つの大納屋の内初めてこの事に出會つた時の子供らしい喜を覚え

つゝ、起風機の拍子正しい音を聞いてゐる心地がする。と、突然光が射し、風見の形が變はり、風車や起風機や納屋の戸口に立つ塵の形が變はる。と、またこれらの物も消え失せる。それらは單なる感銘であつたからだ。けれど或る嗜慾が後まで残る。かうした事が復たあればよいにこの願である」。

驚嘆すべき纖細活潑の想像的理性！「噛みしめて得らるべきでない味」を持つこの詩は、恐らくかゝる蜃氣樓的な環境に於て發動し生動した事であらう。自然界に於ける人間の歌はかくそれを生むだ環境、世界が空幻的に創造される事に依つて、呼吸を初め、血液の鼓動を初める。そして鑑賞者も亦そこに呼吸を初める。この根源なる物とその表現物との兩面鑑賞の態度は狂熱家ミケロアンヂエロの詩に對する次の言葉に依つても明かに知られる。この詩はデュ・ブレエの詩と異つて内面の詩である。

「ミケロアンヂエロの詩の興味は、それが強烈な天性の自らを飾り、自ら

を調和せんとする苦闘を見せてくれる所にある。ダンテの場合と同様に、従順に斷念する心を持ち、温雅となり、沈思的の者とならうと憧憬れる破壊的な悲痛に落ちこまうとする熱情の若闘を見せてくれる所にある」。

かゝる詩は病鬱的な現在とそれを離脱した希望の未來とが同時に並存し、両者が強く衝擊する詩である。この強い衝擊に詩の興味を見出だすと云ふ事は、即ち表現物とその根源のものに對する彼の特別なる關心を語る事にもなる。

扱て一般人の藝術鑑賞の様は如何？彼等の多くは「うまい」と云ひ、「まづい」と云ひ、或ひは「面白い」と云ひ、「變だ」と云つて、それで對象に決定を與へて了ふ。そこに充分沈潜する所がない。これ外面のみを、技巧のみを喜ぶヴサリ流の鑑賞である。而かも一般人の技巧鑑賞はヴサリのそれよりも



一層粗大な物である。それらの皮相にして不完全な事は既に記した如くだ。而かもかゝる外面的な殻を破つてペーター流に自由に内面の世界へ鑑賞を進める者は極めて稀なのである。が、さうした鑑賞の結果は、女主人公の衣裳の數に依つて戯曲の優劣を審く婦人と毫末も撰ぶ所ない事を知れ！

然らば人々は技巧の妙をのみ藝術に求めるか？否。皮肉に引例するのではないが一般人の漫画を喜ぶ一事は彼等が画中に生命、精神を愛求する事を語つてゐる。即ち漫画は畫中の生命、精神が誇張的に分明に飛動するものだ。

生命を愛求しつゝ而かも技巧の上に終始するその矛盾、それは對象の全部と調和融合して共生する途を知らぬか、若しくはその点に鈍感となつてゐるかに起因する。この矛盾からの離脱を教へるものは、各々の藝術が有つ本質的な限界の充分なる体得であり、又先きに述べ來つた音樂的、生命的なペーターの態度であるのだ。少なくとも戯曲の生命を女主人公の衣裳と混同する事

の愚を知る者は、このペーターの態度から深く示教さるゝ所があらう。

所でこゝに一つの疑問が懷かれる。即ち鑑賞者と共生する事に依つてのみその全部を生かし、示す事が出来るのなら、藝術品には絶對の個性がないではないかとの疑問だ。Aなる者と共生したモナ・リザはBなる者と共生した時とは等しくない。それは勿論さうあらねばならない。併しそれで個性がないとは云へぬ。共生する事それ自体が個性の生動を意味するではないか。

「審美批評が對象として扱ふ物、即ち音樂、詩、又人間生活の藝術的な洗練された諸形式は各々それ相等の力を内含してゐる。自然物と同様にそれらはそれ相等の効力乃至特質を所有してゐる」〔文藝復興の興〕序論。雅邦が「一尺四方の小品で千疊敷一杯にならねばいけない」と云ふ程も、秀れた作品には力がある。そしてその力は「審美批評家はその對象の凡てを、多少の差はあれ各々特

異な或ひは唯一な種類の快感を生み出す力と見做す」〔文藝復興〕序論 程も個性的なものである。

共生的な鑑賞的経験を確實にする途如何？即ち、藝術鑑賞を温め育くむ途如何？ペーターは「文藝復興」の序論でそれを述べてゐる。

「この歌、又はこの繪は自分に取つて何であるか？現存の若しくは書中のこの魅力ある人物は自分に取つて何であるか？それは自分にどんな結果を眞に齎らしたか？それは快樂を齎らしたか？齎らしたとせば如何なる種類の快樂であり、如何なる程度の快樂か？その現前に依つて、又その勢力の下にあつて、自分の天性は如何に變改されたか？これらの問題への答こそ審美批評家の關係する根本的事實であるのだ」。

これは對象を力として、鑑賞者自身の内に拾二分にそれを活躍させる態度

で、又その力の下にあつて、例へばモナ・リザ的となつてゐる自己を味到し、且つ成育させんとする態度である。「誰でも太陽であり得る。私達の急務はたゞ眼の前の太陽を追ひかける事ではなくて、自分等の内部に高く太陽を掲げる事だ」と鳥崎藤村氏が云はれたが、これは如上の自己味到から達せられる。ペーターが對象と自己との關係を明かに感得し、更にその勢力と自己の天性の交渉状態を明かにせんとした態度は、畢竟この太陽(對象)を自己の内部に高く掲げん爲である。その鑑賞を有實的とせん爲には對象を自己の内に見、その勢力下にある自己を味到し、育くまねばならない。對象を外に置く事は對象を放棄する事だ。

彼は更に進んで云ふ、「審美批評家はその對象の凡てを、即ち凡ゆる藝術品、自然界と人間生活に於ける美麗なる諸々の形を、多少にかゝはらず各々特異の或は唯一の種類なる快感を生む能力又は勢力と考へる。この力を彼は感

じ、それをその諸要素に分拆し、還元して説明しやうとする。彼にとつて繪や風景や又は現存或ひは文學にある魅力有つ人々やモナ・リザの繪、カラ、の丘やミランドラのピコヤはその有つ効力の故に尊重されるのである。又各々が有つ特殊な、唯一な快よい印象で人々を動かす特性の故に尊重されるのである。それは宛かも藥草や葡萄酒や寶石の場合の様である。……で、審美批評家の任務は。繪や風景や現存乃至書中の魅力ある人物が依つて以つてこの特殊なる美或ひは快樂の印象を生むその効力を、その數々の附屬物から區別し、分拆し、切り離す事にある。その印象の源泉が何であるかを指示し、又如何なる状態の下にてそれが經驗されたかを指示する事にある」。

對象の力をその要素に還元し、その効力を一切の附屬物から切り離し、又その印象の源泉を探つて、我々はその對象の創造に參與する。我々自身を對象が創造されて出た源泉に置き、その創造的動因、原動力を享受する。かく進

められて初めて鑑賞は生命的となり、創造的ともなる。そしてその鑑賞的經驗をして、立琴か笛の音の如くならしめ、それが變化する我々の容貌を形造り、眼臉と手とを染める微妙の裡に響かせる事が出来るのである。

終りに是非一言せねばならぬのは、かく音樂的な、生命的な藝術鑑賞をしたペーターの藝術鑑賞観である。

彼にとつて萬物は流轉して止まる所のない物であつた。従つて我々は凡て死刑を宣告された者で、唯執行される迄の猶豫を有つと云ふに過ぎない。それも計り得ぬ曖昧な猶豫期間だ。かくる我等に許された唯一の活路とはこの猶豫期間を擴大し、能ふ限りの鼓動をそれに與へる事であらねばならぬ。故に點より點へと最も活潑に移り進み、常に生命力の最大多數がその最も純粹な様で結合してゐる焦点に身を置き、常にこの壯にして寶玉の如き生の焔を以

つて燃え上り、この恍惚を保持する事は我々が人生に於ける成功に外ならぬ  
 藝術はそれをさす力を持つ。即ち藝術は過ぎゆく我々の瞬間にその最高の  
 質のみを提供する事を、而かも唯だ單にそれらの瞬間の爲のみに提供する事  
 を率直に申出てくるものだから。で、少なくとも「この世の子等」の中で最  
 も賢明なる者等はこの猶豫期間を藝術と歌の中に過ごさうとする。が、かう  
 した人生の成功を獲得し、保持する爲めには我々はこれら藝術品の與へる印  
 象に對する感受性を廣さと深さの点で増大さす事に努めねばならない。して  
 それらの増大に比例して、我等の教養も完全となつてゆくものである。

これがペーターの藝術鑑賞觀である。彼が技巧的鑑賞に墮しなかつた事も  
 肯かれる。だがこの緊張した態度は一般人の藝術鑑賞に迄適用されるもので  
 はない。ではあるが一般人もこの態度に學ぶ所あるならば、その遊戯に於け  
 る天惠の意外な深さに對する驚異と感謝の念を深め得るであらう。

◎ 讀者へ

藝術の生命的本質的研究をして、月々の小集會を隔月發行の小冊  
 子まで發表したいと思ひます。この主旨から本會は研究者と一般  
 藝術愛好家の入會を歓迎します。(入會希望者は往復葉書で御一  
 報を乞ふ)

續刊  
 豫告

文學と人生批評 一幕劇とその技巧  
 マシユウアーノルドの詩の鑑賞 新文學論

購讀希望者は直接に申込み願へたなら好都合です

文藝研究會

大正拾五年三月二十五日印刷納本  
 大正拾五年三月二十九日發行

名古屋市西區手木町十二番地

著作者 關 康 盛  
 發行者

名古屋市中區中ノ町三丁目

印刷所 眞野印刷所

印刷人 眞野 大助

定價廿五錢

549  
36

終